



松村 泰輔 編輯  
 近世 櫻田 紀聞  
 初輯  
 上

13  
 3307  
 1





3307  
1

明治八年四月日

松村春輔編輯  
月岡芳年畫圖

櫻雨園社  
中巴匣版

# 近世櫻田紀聞

初輯  
二冊

東京發賣所 文永堂

## 櫻田記聞序

凡萬國所以能保持其獨立者何也唯  
 以其人民有竭各自之義務也人若不  
 守義則不異禽獸國若無人則難保  
 社稷義之於人猶草木有根也木若斷  
 其根枝葉何因能繁茂人若失其義忠  
 孝何因能發生所謂報國心者竭其義  
 於國事之謂也國果無義士則無其內

大正八年  
本大學出版部贈



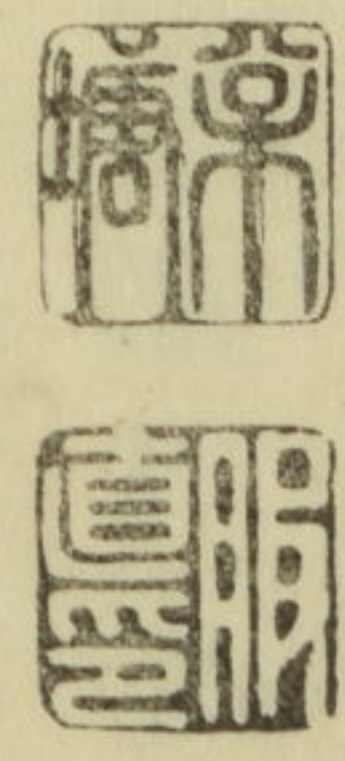
之憂者與憂由之互若則亦無意外之  
患若無患亦之患若則國家何以能獸  
立大哉義乎近頃松村氏記水戸脱士  
佐野某十八名之事名櫻田紀聞而將  
以於世來需序於余此士也迅抱報國  
之浩志而以死憂國義憤激勃忠勇奮  
起不堪其憂而遂有櫻田之一舉一舉  
也雖不免暴亦其志不出於憂國之外

况當時之景况不未脱武夫之頑癖耳  
焉物議紛紛人心勦搖彼輩當此際首  
唱義特馳其兼心於一途之所致也若  
使之在今日則可果為國家開明之一  
臂也故雖身與櫻花隨地名可從董百  
歲松村氏之有此舉欲因以勸獎後生  
是亦可謂善舉也余亦記數言以表  
其義子時明治八年第四月櫻花爛熳



筆研為紅恍有當年鮮血淋漓濺養膽  
之想合記曰為叙

巖代 服部誠一撰



得所名人書

源烈公遺墨

兜胴物洗よろしき  
文字の出来し  
一字を三四字と云  
三四兩り撰り  
此の書畫忠の多味  
又いふ花子変化の  
名いふなり

青木氏所藏



美浦野見  
雪折まじり  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ



佐野竹之助

あまのこゝろ  
あまのこゝろ  
あまのこゝろ

録  
蓮田市五郎詩  
呼狂呼賊拖他評  
多歳怨雲今日晴  
正是櫻花好時節  
櫻田門外血如桜



大關和七郎

齋藤監物









君のるえをせしむるはよき男の  
 名はつとむるはかたはるはつとむる  
 有村の伝



有村次左門

近世櫻田紀聞初編之贅言

這書の嘉永六年の夏米國の使節来泊の緯は起り源烈公  
 の忠諫幕府は盡く給ひ顛末より元老井伊直弼主が  
 權威疎暴の振舞ふ做ひ時の幕吏等 天朝の勅を  
 輕視しつゝ諸侯も幕府の意に應せず自然は違路を  
 顯す不隨ひ有志等元老の罪を鳴はる莫約を綴り第三回  
 到り水府の有志同盟を結び長岡は元老擊殺の集議を  
 做く緯決して國を脱するの條下は初集二冊の局を結べり  
 第二集の脱士等江戸は潜伏の奇談より終は櫻田の變を

櫻田紀聞



綴り大團圓と做す。此の近きふ成刻して發布あり可し。  
 本文も烈公の傳をも聊録して省官の覽は具也。陳烈公の  
 先祖光國郷より此の水戸家の累世賢君ありぬを無く素より  
 勤王の志厚きふ又佐幕の深切成る親藩も雙ぶなり。近世の  
 英傑も衆く水府は听え其の中も名臣と喚ぶもの  
 藤田彪武田正生あり。然もども彪の薄命も早く鬼藉に  
 陥り正生の勢ひ無名の師は死するを俱に聖代の現は在るを  
 遂に烈公の宿志も果しつらん。編者も更に遺憾多かり。  
 本章は眼目とす。元老の緯あり。省官注意して讀む。元老井伊

櫻田ロ六

彦の先祖閑院の左大臣冬嗣公の七男内舎人良門五世の孫備中守  
 共資の男備中大夫共保より井伊の家号を起し其後胤肥後守  
 直親の男侍兼兵部少輔直政徳川氏草創の折より強く忠  
 戦の武功あり。江州彦根に封土若干を領しより這く徳川  
 老臣の席に列し。當時直弼主元老の職に座し。内外事の多端に  
 りも國政の疎暴私怨を仁と罪する故終に櫻田の春雪小腐  
 名を曝し。到る其將徒より者。やとて口惜かり。法々の  
 然もども。王政復古の戦ひより彦藩力を官軍に尽し  
 其功拔群ありを以て祖父の朽名の雪と謂べし。

櫻田系圖

ロ七



此書の原本多く其頃の日記や一の雑書或は十八士の親族の傳話を掲げ或は近世の史畧中を折衷して一篇と做す故に誤事多しを得也。編者一層疑案なり。俾は賜顧億兆の君子其僻言を校正言遺多し更は改定の勞を盡すを願ふ。

明治八年四月中幹櫻雨  
園中の花正は春風は開の朝

紅雪山入春輔識



右二葉 鶴田容淨書

櫻田リヒ

新説 春書 近世櫻田紀聞卷之五

東京寄留 松村春輔綴

第壹回

孝明天皇の萬延元年三月三日櫻田御門外不於々  
水戸の脱士佐野竹之助、黒澤忠三郎、鹿兒島の藩士  
有村治左衛門を始し十八名が大老井伊掃部頭  
直弼朝臣が上巳の賀として登城の折柄、其の行列  
を襲撃、一終り中將の首を討取り、其の名を



史<sup>し</sup>歷<sup>り</sup>不<sup>ふ</sup>殘<sup>ざん</sup>たる<sup>る</sup>緯<sup>ゑい</sup>の原<sup>げん</sup>意<sup>い</sup>我<sup>が</sup>尋<sup>たず</sup>ぬる<sup>る</sup>是<sup>これ</sup>よ<sup>う</sup>聖<sup>せい</sup>嚮<sup>きやう</sup>  
 嘉<sup>か</sup>永<sup>えい</sup>六<sup>ろく</sup>年<sup>ねん</sup>水<sup>すい</sup>無<sup>む</sup>月<sup>げつ</sup>の事<sup>こと</sup>なりけり相<sup>さう</sup>摸<sup>もく</sup>の國<sup>こく</sup>三<sup>さん</sup>浦<sup>ぷ</sup>郡<sup>ぐん</sup>  
 浦<sup>うら</sup>賀<sup>が</sup>の港<sup>みなと</sup>外<sup>がい</sup>國<sup>こく</sup>艦<sup>せん</sup>四<sup>し</sup>艘<sup>そう</sup>渡<sup>わた</sup>来<sup>き</sup>せり<sup>こ</sup>這<sup>こ</sup>を<sup>あ</sup>亞<sup>あ</sup>墨<sup>め</sup>利<sup>り</sup>加<sup>か</sup>  
 の國<sup>こく</sup>部<sup>ぶ</sup>内<sup>うち</sup>あ<sup>ら</sup>く共<sup>きやう</sup>和<sup>わ</sup>政<sup>せい</sup>治<sup>ち</sup>を<sup>あ</sup>開<sup>あ</sup>智<sup>ち</sup>せ<sup>り</sup>合<sup>がっ</sup>衆<sup>しゆう</sup>國<sup>こく</sup>カ<sup>リ</sup>  
 ホルニヤを<sup>し</sup>出<sup>しゅつ</sup>帆<sup>ぼん</sup>考<sup>こう</sup>する<sup>る</sup>軍<sup>ぐん</sup>艦<sup>かん</sup>二<sup>に</sup>艘<sup>そう</sup>蒸<sup>じやう</sup>氣<sup>き</sup>船<sup>せん</sup>二<sup>に</sup>艘<sup>そう</sup>を  
 り<sup>ま</sup>儲<sup>たくわ</sup>え<sup>り</sup>の<sup>あ</sup>亞<sup>あ</sup>米<sup>めい</sup>利<sup>り</sup>加<sup>か</sup>國<sup>こく</sup>と<sup>り</sup>い<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>其<sup>その</sup>嚮<sup>きやう</sup>英<sup>い</sup>吉<sup>じ</sup>利<sup>り</sup>國<sup>こく</sup>の  
 屬<sup>ぞく</sup>地<sup>ち</sup>あ<sup>ら</sup>く罪<sup>ざい</sup>人<sup>にん</sup>我<sup>が</sup>遠<sup>えん</sup>流<sup>りゆう</sup>あ<sup>ま</sup>の<sup>と</sup>所<sup>ところ</sup>なり<sup>けり</sup>我<sup>わが</sup>日<sup>にっ</sup>  
 本<sup>ほん</sup>安<sup>あん</sup>永<sup>えい</sup>の<sup>と</sup>頃<sup>ころ</sup>より<sup>こ</sup>國<sup>こく</sup>人<sup>にん</sup>大<sup>だい</sup>に<sup>た</sup>奮<sup>ふん</sup>發<sup>はつ</sup>し<sup>て</sup>和<sup>わ</sup>聖<sup>せい</sup>東<sup>とう</sup>と<sup>り</sup>

る<sup>る</sup>その<sup>を</sup>大<sup>だい</sup>將<sup>しやう</sup>と<sup>し</sup>戰<sup>せん</sup>ふ<sup>て</sup>八<sup>はち</sup>年<sup>ねん</sup>遂<sup>つい</sup>に<sup>に</sup>軍<sup>ぐん</sup>を<sup>あ</sup>歩<sup>しゆ</sup>勝<sup>しょう</sup>つ<sup>て</sup>自<sup>じ</sup>  
 立<sup>りつ</sup>の<sup>けん</sup>權<sup>けん</sup>を<sup>と</sup>得<sup>え</sup>たり<sup>けり</sup>夫<sup>その</sup>より<sup>あ</sup>大<sup>だい</sup>い<sup>に</sup>威<sup>い</sup>を<sup>あ</sup>振<sup>び</sup>り<sup>し</sup>が  
 我<sup>わが</sup>天<sup>てん</sup>明<sup>めい</sup>の<sup>と</sup>頂<sup>てい</sup>より<sup>あ</sup>彌<sup>い</sup>廣<sup>くわう</sup>大<sup>だい</sup>繁<sup>はん</sup>華<sup>か</sup>の<sup>ち</sup>地<sup>ち</sup>と<sup>し</sup>倣<sup>な</sup>り<sup>けり</sup>今<sup>いま</sup>を  
 屬<sup>ぞく</sup>國<sup>こく</sup>三<sup>さん</sup>十<sup>じゅう</sup>一<sup>いち</sup>州<sup>しゅう</sup>の<sup>と</sup>長<sup>ちやう</sup>たり<sup>けり</sup>よ<sup>の</sup>國<sup>こく</sup>を<sup>わ</sup>我<sup>わが</sup>日<sup>にっ</sup>本<sup>ほん</sup>と<sup>し</sup>異<sup>い</sup>に  
 聖<sup>せい</sup>主<sup>しゅ</sup>世<sup>せい</sup>々<sup>じやく</sup>統<sup>とう</sup>を<sup>つ</sup>繼<sup>つぎ</sup>て<sup>り</sup>位<sup>ゐ</sup>に<sup>あ</sup>即<sup>つ</sup>め<sup>り</sup>て<sup>り</sup>才<sup>さい</sup>畧<sup>りやく</sup>人<sup>にん</sup>望<sup>ぼう</sup>  
 を<sup>あ</sup>兼<sup>あ</sup>た<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>我<sup>わが</sup>撰<sup>せん</sup>を<sup>あ</sup>在<sup>あ</sup>位<sup>ゐ</sup>四<sup>し</sup>年<sup>ねん</sup>を<sup>あ</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>期<sup>き</sup>と<sup>し</sup>國<sup>こく</sup>  
 内<sup>うち</sup>を<sup>あ</sup>治<sup>ち</sup>め<sup>り</sup>し<sup>て</sup>む<sup>る</sup>定<sup>さだ</sup>め<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>む<sup>も</sup>王<sup>わう</sup>賢<sup>けん</sup>あり<sup>て</sup>賞<sup>しょう</sup>罰<sup>ばつ</sup>正<sup>せい</sup>  
 一<sup>いつ</sup>け<sup>き</sup>に<sup>あ</sup>期<sup>き</sup>年<sup>ねん</sup>我<sup>わが</sup>重<sup>じゆう</sup>め<sup>り</sup>る<sup>も</sup>吏<sup>し</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>と<sup>し</sup>欽<sup>きん</sup>當<sup>たう</sup>時<sup>じ</sup>の<sup>こ</sup>國<sup>こく</sup>王<sup>わう</sup>



姓を斐謀名を美竦進とりり長臣波理と使節  
 して通信貿易を倣さんとも國書を持って来り  
 たり然るを我皇國ふて開辟の往古より悠る  
 例のあらざきを幕府ふおめ断然と決する能  
 是より彼が持来り國書を翻譯倣さしり  
 諸侯を集めて意見を問ふ就も和戦の二字を議論  
 一更に確定為さるけり  
 編者云ふ本文の櫻田ふ井伊中將を撃殺せ十八人

の繹を眼目とする代をつて亞墨利加の使節渡来  
 の始より復歴茲に書記さず开の余が前著  
 一たる復古物語を一覽せを繹する瞭然倣  
 たなつん諸是より談出すの嘉永六年米國使節  
 渡来の頃より日夜肝膽を碎さるひ一故の大樹  
 家慶公の甚く心脛を勞せらる漸次病弱重  
 らせあひて終ふ七月二十二日薨すの躰を遺骸  
 を増上寺に葬り慎徳院殿と謚し嗣子家定公



を立て徳川十三代の將軍と從二位内大臣の叙任  
ありしが僅うの六年を編て安政五年七月八日三  
十五歳にて薨つたゆゑ前後より説出せば看官  
是れ注意して讀めば益か

別行

茲に突東の外國より日々通信貿易の緯を逼  
しうを閣老參政を預め和議を做さんと決意せし  
より只管朝廷に請奉り通信の許允を願出んと  
既子閣老堀田備中守正篤も京師に登り大りの

尽力を爲すといふども縉紳家の内ふく中山權大納言  
万里小路正房卿等関白尚忠卿も逼り終に通信  
を留めひしより堀田備中守も詮方なく関東に故り  
猶外國のよみの心勞做り衆議を凝り幕吏等  
俱に談むるやう這度國家の大事件に倚り  
を伺ひ奉らんと閣老速に儒臣をして遙々登京做  
さしめし時勢を考ね青公家輩が突東の意を叛  
き屢々勅許を妨とぐる茶憎も憎し下ふぐう倘し





諸侯の柳營に  
米國の書と  
來觀る

梅  
白  
終  
一

四



この終小閣うが関東の武威哀頼べし縦ひ勅許る  
 あらざるも素より征夷の職掌を委任せしむる徳  
 川家なまを茲に注意し断然の所置を計らひ可  
 あらん欵債天下の形勢を察視ふ今外患を除んと  
 是致拒絶傲き時を忽ち乱階を生ずべし而して西  
 洋各國を敵と引受闘ひあが争う勝算の目的あら  
 ん又開港の締り決せを國內の人心動揺し憤怒を發  
 する輩ありて邦内隔絶ふ至りぬべし然れども内地の

乱を如何様とも平治為安し尚外國と干戈を交へ  
 あら容易に鎮靜すると難く還て皇國の安危を  
 拘らん夫是押て看る時に戦ひ止て和議する廻り  
 まのりて國の為且人民の為ありあま強ち違勅  
 とりふべきくの怒ひ奏問を遂るが故に其虚を乗る公  
 家輩が兎角故障を演立て奏議を再度拒むあらし怒  
 姑息の手敷を棄て断然其咎を堪べき人を撰て出して  
 今更ふ大光職を委任すると専務あんと幕吏等おのが



勝手を主張し遂に徳川家の武威をも輝うさん  
 と驅る彦根中将井伊掃部頭を挙る執權職と倣  
 たりけを恣り程み彦根中將を大老職と倣り  
 あり引續ひく太田入道道醇、鯨江侍従、西尾侍従等  
 を汝が腹心なりとて威閣老を再任させ、切り幕  
 威を振ひ心の随ふ政を取り行ふ、中ふも日  
 逼り外國の緯あり彦根中將思ふやう今我  
 國の危るに實も薄氷を踏か如きを朝廷に

目前に

如

靖ひ所置做す時、緯ふ後ろのをなぐ、外國人の怒を  
 受る萬一、支の過ちより一回兵端を開く時、各國總  
 て敵と倣る、恣る危道を踏んより、漸然通信交易の  
 條約を結ぶ、示すと遂に米國の使節ハルリス、  
 神奈川に於て條約を結び、印信を遞与す、魯西亞  
 英吉利、佛蒙西等も俱に條約及び、此音京師  
 へ奏問ありしかば、朝議いよく粉々として、總うる  
 らん、這時不當り報國有志と稱ふるもの、諸國



よりして京攝の間あひだに往復きうくふ倣なまし同志を募つり徒とを結むす  
 び勤王攘夷の説せつを鼓動こどうし井伊中將いゐちゆうじやうが權斷けんだんふく  
 外國と條約じョウやく倣なませしと听きとひくく幕府の朝  
 憲を輕蔑けいびつ倣なます或憎むのあり井伊中將の繚杯  
 る更さらふ憚おそる氣色けしきもなく口くちを開ひひく罵ののしける恣  
 る所ところに閑東くわんとうふてる在府の諸侯しよとう开ひく中ちゆうの土州侍  
 従信肥前少將しんひぜんせうじやう齊せい因州少將いんしゆうせうじやう慶けい宇和島侍従うわしまじじゆう城津  
 山中將やまなかじやう倫りん等の五侯ごこうを和信わしんを強かく歎なげうせありひて

あをく諫書かんしょを呈せいし井伊中將いゐちゆうじやうを始はじめと  
 て容老くわうらう參政さんせいに至いたるまが毫こも採用さいようの氣色けしきなけれ  
 ば茲こゝに又水戸中納言みづうちのちゆうなごん齊昭卿せいしやうけいも是これまが幕府を  
 諫かんたるひし事こと幾度いくたう今いまを書をのりて諫かんむら  
 とも井伊中將いゐちゆうじやうが慕威ぼゐを振ふるひて迎むかへ攘夷じやういの沙  
 汰さいのありまは是これより尾州びしゆう越前えぜんを始はじめと倣なまし  
 諸侯しよとう一同登城どうとうとうじやうし將軍しやうじんに逼せまり攘夷じやういの大舉たいこを  
 促うぐんを専務せんむなると遂ついに登城とうじやうの御決心ごけつしんを



其の臣武田伊賀守しんたけごい召まさせたるふふ紀州家きしゅうけを除のぞ  
 くの外ほかを皆中納言みなちうなごんの御同意ごどういなるみぞ五月下旬ごごげつしゆげん一  
 同登城どうとうじやうの決議けつぎと倣なり其日そのひを遅おそいと待まちとけり  
 其の水戸中納言みづのちうなごん名なを齊昭あきあきとりひ字あざなの予信景山よしのけいざん  
 と號なづし幼名よりなを敬三郎けいざうらうとりり文政十二年ぶんせいじふにねん其封そのふう  
 土どを襲つぎ從三位中納言じゆいざんちうなごんを叙任じよにんさくさるゝ這君人あきまひと  
 とあり英明えいめいありて果斷こつぜんありけり假初かりそめふ為なめふ  
 緯いととる人の意表いひあらふおとまりまらんみぞ外患がいわんの防禦ぼんぎよも

夙むとみ先見せんけんありたるひ既すでに尊攘そんじやうの説せつを鼓舞こほふし是これよ  
 り嚮天保辛丑きやうてんぽうしんじゆの年海岸防禦かうがんぼんぎよの手當てあてなくしていか  
 あんまあとくとく國內寺院こくなんじやういんの梵鐘ぼんかむを卸おろさせ巨碩きよさく  
 を鑄造ちゆうぞう倣なりたるひか幕府まくふありて外患がいわんの  
 防禦ぼんぎよ多おほく思おもひ由依よらぬ頃ときなるみぞみぞ竊ひそくふ  
 中納言ちうなごんが異心いしんありて憊うる用意ちゆういを倣なりたるひ  
 大おほき疑念ぎねんを生いじつ同十五年どうじふごねん弘化元年こうかげんと改元かへん  
 ありし甲辰かうしんの夏五月なつごごげつ中納言ちうなごんを江戸えどに召寄まよせ



駒籠の邸内あつる幽閑あやう倣なせは此度このたび外國がうごくの緯起とこる  
不逮おとび幕府まふ其所そのよち置おきる苦くるし又また中納言ちゆうなごんの英才えいさい  
を慕しのひしこのこの幽閑あやうを解ときく國事こくじの政務せいむ  
みみつつかかししめめ井伊い中將ちゆうしやうがが大老だいらう職しやくと倣なら  
ままししよりより中納言ちゆうなごんの職務しやくむをを只名ただなののまましし中將ちゆうしやう  
が果斷かくだんみ倚よらずらずととりりよよとななりりささききききばば外がうへへ  
この條約じョうやくささんん事じをを成なり後のちみみ至いたりり中納言ちゆうなごんの  
所ところへへけるけるみみをを遂なりみみ將軍しやうぐんと御對顔ごたいがんみみくく攘夷じやういの

大義たうぎを拳あげんととすすみみ至いたりりししをを是これよりより中將ちゆうしやうが  
權威けんいををままししるる再またびび中納言ちゆうなごんを幽閑あやう倣なしし彌慕やぶら  
威いの主張しやうちやうより終はるる櫻田さくらだの椿事つばきじと倣ならら自然しぜんの  
理成りせいるるべべしし引續ひきつたりり文段ぶんだんを讀よみみ得えるる悟さと  
りりたた多たひひ秘ひかか

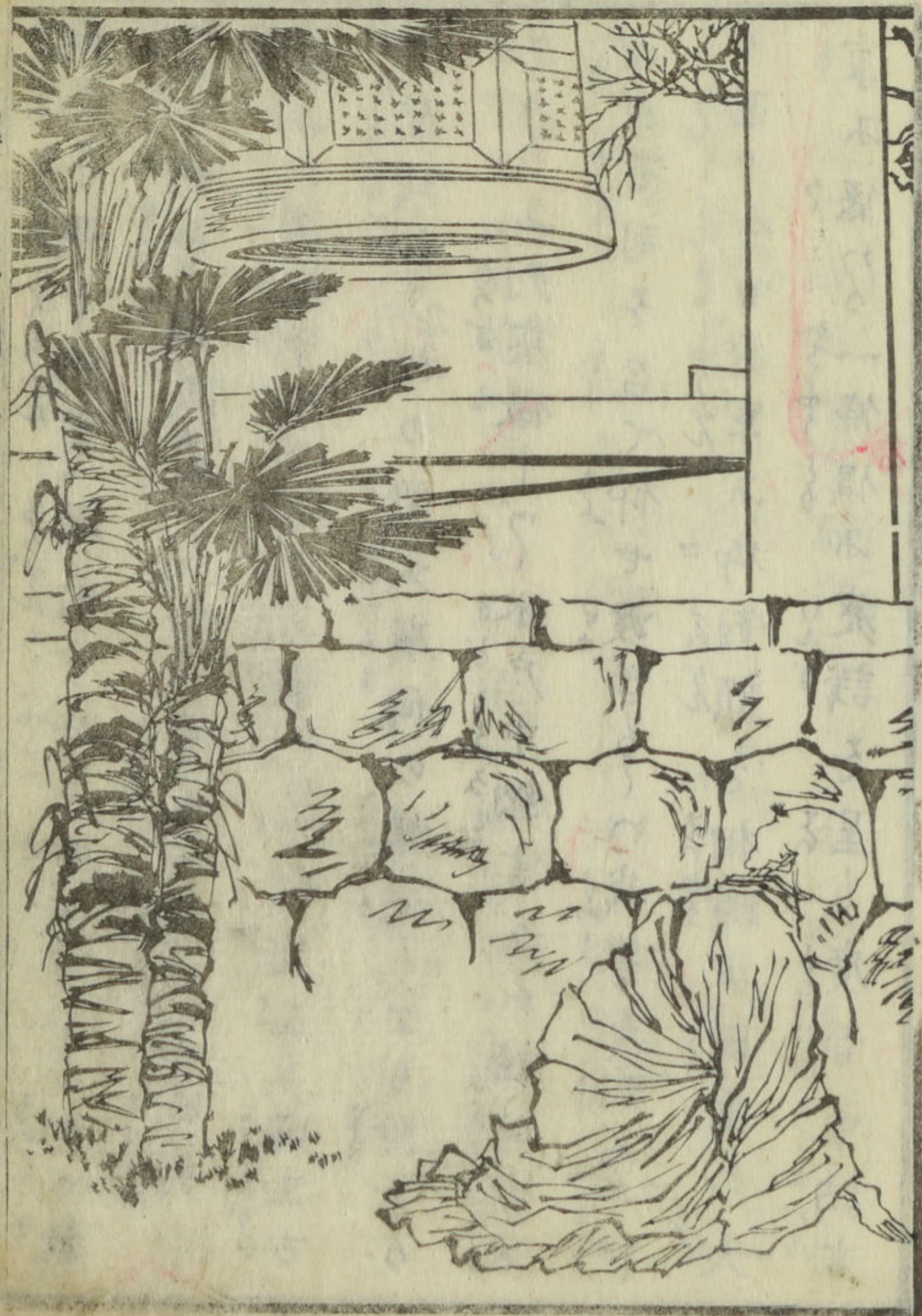
第貳回

茲こゝみ水戸みづと中納言ちゆうなごんのの曩さきもも談出だんしゅつせせしし如ごとくく將軍しやうぐんの  
御對顔ごたいがんああららせせららししてて攘夷じやういのの一義いつぎを演舌えんぜつせんせんと

櫻田巳上

十





花はなのはな根ねのね鐘かね聲こゑ  
 非常ひよのひよ見み止と止と止と止と止と





既すなはち尾張中納言おつりちゅうなんごん。越前中將えちぜんちゅうしやうを始はりしめし内々うちうち數度かずどの御會議ごぎわいぎもあししめを登城とじやうの定日ぢやうじつも延引えんいんし  
 遂すなはち六月二十三むつきさんじゅうさん日右の三家さんけのりも更さらなり國主くにぬし方  
 も登城とじやうあり松の間大廣間まつまはらひまの椽通えんどおりも除あき  
 むりりみ列座れつざ一ツ水戸中納言みづとちゅうなんごんあり諸公方取  
 次つぎの有司ゆうしを召よりて仰あやせ渡わたさすの我等われらを始はり一いつ歩  
 の面々めんめん今日將軍けふしやうぐんみ御對顔ごたいげんを相願あひねがひ國家の大  
 事ことみ係かり一いつ條じやう俱ともみ建議けんぎを呈まし度旨たくま中納言ちゅうなんごん

12 就

より伺うかがひ奉たまるやう取次とりつぎ致いたしたるまりしと申まされ  
 けを取次とりつぎの有司ゆうし開ひらけり候まうへども折悪せうあく數將家  
 みの昨日きのうより御氣分ごきぶん例れいも御對顔ごたいげんの程ほど覺  
 束たなか答こたへけるを尾張中納言おつりちゅうなんごん申まされりしのみ  
 既すなはち我等登城とじやうし將軍しやうぐんの御病氣ごびやうきと承うけりり  
 這こまり歸館ききんするま於おては是こゝ又また本意ほんいみ背そむくま似にと  
 り左ひだりの御病氣ごびやうきの御伺ごうかがひ申まししあげんのぎ取  
 次つぎ致いたされしと強つよて有司ゆうしへ逼せまりしるま取次とりつぎの



言葉

別行

有司も今へ通る（通る）諸（諸）多く其由將軍へ申しあげ  
 んと奥用人まが取次しうど將軍家の誠の外所腦  
 重せしと御對顔の儀相不叶とのふより其旨諸  
 侯方へ答へけり然るふ水戸中納言の將軍の御病  
 氣違ひ必ず偽りなりと心中尤も不平を發し是  
 まが御せし今日の儲を此終めて止るんと実ふ  
 残念の至りならん（残念）暫くそふ扱へ居て又せん術も  
 あらんとのと獨意中ふ秘りし正午の頃まが

待受あり又取次の有司を召て中納言より重て將軍  
 御伺ひ申し上る旨取次な多るべし今朝伺ひま  
 ふせし御病氣の故をとりて御對顔許しありし  
 ざりしが最早時刻も相立バ御全快もとり難し  
 千萬恐れあり分るる今壹度御對顔を願ひし  
 けりんと仰せしとけりあぞ取次衆へ重き奥用  
 人み斯と演舌ありしうが暫くありし取次衆を以  
 て水戸中納言を始め其餘の諸侯も仰せ達せら

嬰田已聞上

十三



るやう將軍の漸次御腦重らせらるるに迎ひ今  
日中めの御對顔の程不相叶ず是より井伊掃  
部頭を以て建言の趣き取次へしの上意によ  
り程なく大老掃部頭めの此所へ出仕ありべしと  
有司の語終らざる内大老井伊中将直弼の松の  
間へ出仕做し時候の禮讓品ありて叔應接み  
及ばるめめ今朝より恁むり御三家を始め諸公  
の方々再度御對顔を繕むと人ども折悪敷大

樹公めの御氣今例ありざるめを直弼建議の趣き  
を承り大樹公め言上仕らんと更み憚る気色も  
なく列坐の諸侯へ談判し速づとけを待儲け  
たる所あるめを尾張中納言の衆め嚮んと進み出  
られ彦根中將に仰せらるめ先達而外夷渡来  
の折柄我が皇國を開闢の往古より他方と通  
信做さるる法則あるをとりて速く鎖港の議論  
を建白す諸侯咸違論ありたる所朝廷も

櫻日巳開上



は何故か

強く外虜を憎ませたるは屢攘夷の勅命あり  
を獨り貴殿の權斷し倚り夷と條約いささごと  
や今日將軍家御對顔を請ひし由余の支件  
即ち鎖港の策を決定せさんか為るは  
てや貴殿の家柄を東照宮の御在立より數代徳  
川家の譜代より四老臣の其一人実み御家の柱  
石とも頼むべきに徳る國家の大支件を汝が慕  
断ふまうせり當御家の不為のとならんや畏れ尋

くも 朝廷へ對し奉り征夷の職に堪るとりふ  
何をとりてり辨論せんこの伐怎と切逼り理を  
か一言棄を和らげて彦根中将結向あれ申將  
是ふ答へるは許より掃部頭不省もども既み大  
老の席を穢せむ 朝廷いりも更あり徳川御  
家の不為とせる政事を怎で計らりん今直弼が  
辨ずる更水戸殿を始めとして諸公方も暫時が  
間听れより既み嘉永六年水無月より外夷

櫻田日記

十一



皇國に渡来~~せ~~し通信交易を條約~~せ~~さんと日夜  
 政府に逼りし~~は~~一端夷等を憎むのあり~~は~~攘夷  
 と~~は~~決定~~せ~~し~~は~~只一國の敵のそ~~は~~あ~~ら~~ず立衆残  
 らず同監あ~~ら~~ま~~ら~~ば外國過半を敵と~~し~~あ~~ら~~じ~~は~~維持せ  
 る術あ~~ら~~ん~~は~~嚮きの清國廣東の如き轍を踏~~み~~無謀の攘  
 夷の勝算決して覚束な~~ら~~し然りと~~し~~り~~は~~ども直弼の~~は~~外夷  
 の武威を語りつ~~は~~俱に恐怖を述ぶる~~は~~あ~~ら~~じ~~は~~素より  
 直弼が所存と~~し~~り~~は~~今海岸に炮臺を築き陸の防

禦の要柵を構へ外虜と干戈を交へ~~ば~~其鬪戦の虚  
 實を伺ひ國內の中みても必ず乱を醸~~し~~事鏡に掛  
 て見るが如し~~は~~恠る危政を~~は~~せん~~は~~り~~は~~兎角泰平~~は~~ん  
 と~~は~~誠~~に~~國家の御爲~~に~~あ~~ら~~んと~~は~~假~~し~~和親を~~は~~結~~び~~ま~~ら~~る  
 り然りと~~し~~り~~は~~ども條約の~~は~~要件~~に~~是~~は~~咸~~に~~京師に~~は~~伺~~ひ~~く  
 吏の~~は~~ろくに~~は~~至り~~し~~あり~~は~~と言路~~を~~夾~~み~~る~~は~~答~~へ~~ら~~し~~る~~は~~を  
 水戸中納言進~~を~~出~~し~~逐一中将殿の議論を~~は~~听~~き~~唯泰平  
 を期~~し~~さん~~が~~爲~~し~~我~~に~~神州の國耻を思~~は~~ず~~は~~外夷の術





長日二月六



諸侯  
列  
元老の  
非と論を

梅田

廿七



中ちゆう不ふ陷おちり終つひみ彼等かれら不ふ役やくせしむと奴僕ぬがくの如ごとくあらん事こと  
 我われが先見せんけん不ふ違ちがふます斯ごとく今日こんにち論ろんずらん先達さきだちて外夷がいゐ所ところ  
 分ぶんの緯ゑいは依より各忌憚おそをををかかん建言けんげん做なすやう  
 台命たいめいありて諸侯しよこう建議けんぎを呈ていせし所ところ十じゆ八はち九くの掃攘そうじやうを  
 了りふ衆議しゆぎ漸しだく確定くわてんし朝廷てうていのいふも更さらなり幕府まくふ不  
 於おくも全国ぜんこくの衆議しゆぎみよりて御決断ごけつだんたりせられ既すでに  
 兵端へいたんを閑ひまうんとする折柄せつがら更さらに諸侯しよこうの異見いけんも謀まらざ  
 唯獨ただ断たふ條約じョうやくを做なし人民じんみん揺動ゆどうの後のち難がたも察さつせざる

慶

是

奉行

如ごとく斯ごときの幕政まくせいの神人あんどん俱おみ容ゆるざるべし徳とくる條下じョうげを察さつ  
 一ひとあが獨ひとりり慕威ぼゐの振ふるふます今速いますみうふ前非ぜんひを悔悟くわいごし  
 條約じョうやく破談はだん致いたさるべし若ごとく又また這儀このぎを容ゆるざるふ於おてり朝あ  
 廷ていの為ため國くにのたれ國くにを乱みだる奸賊けんぞくあり意い中將ちゆうしやう今  
 齊昭せいしやうがりふ所ところ毫こも辨解べんげする旨あやありや承うけたりんと結むす  
 寄よりあふ彦根ひこね中將ちゆうしやう答こたへあふ只今ただいま水戸みづと殿どのの御論ごろんの直ちか  
 弼しやくを以もつて奸賊けんぞくと喚よびりあふ條約じョうやくの一条いっじョうの實まこと以もつて直弼ちやくしやく  
 人ひとの所存しよぜんふあらん畏おそる多おほくも朝廷てうていの勅許ちやくきょ不ふ隨したがへ申まう

櫻田日記 四十一



何の事

さぞんを違勅の罪に遁れま<sup>ど</sup>猶亦勅許の下る共將軍  
家の御指令<sup>を</sup>以て<sup>り</sup>意<sup>を</sup>以て條約を結ぶべき然る<sup>も</sup>直彌を  
奸賊ありと喚り<sup>し</sup>更<sup>に</sup>其意を辨<sup>す</sup>ぬ<sup>べ</sup>田<sup>代</sup>野<sup>人</sup>の  
譬論<sup>を</sup>以て中納言殿の御辨論と<sup>も</sup>伺<sup>り</sup>ま<sup>す</sup>然<sup>ら</sup>ば  
貴殿<sup>は</sup>尋<sup>ね</sup>申<sup>さ</sup>ん外夷と<sup>も</sup>約<sup>を</sup>結<sup>び</sup>し<sup>に</sup>勅許を得<sup>し</sup>後  
將軍の指揮<sup>を</sup>隨<sup>ひ</sup>計<sup>し</sup>し<sup>に</sup>何<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>今<sup>も</sup>申<sup>せ</sup>お<sup>と</sup>く  
勅許を得<sup>し</sup>後計<sup>し</sup>し<sup>に</sup>何<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>左<sup>き</sup>も<sup>も</sup>貴<sup>殿</sup>の辨駁<sup>を</sup>疑<sup>は</sup>  
念<sup>を</sup>生<sup>ま</sup>る<sup>も</sup>更<sup>に</sup>何<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>示<sup>し</sup>来<sup>り</sup>我<sup>等</sup>が覺悟<sup>の</sup>為<sup>に</sup>お<sup>と</sup>の

勅文を拜見せん<sup>に</sup>何<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>素<sup>より</sup>勅書<sup>の</sup>將軍<sup>も</sup>自身<sup>秘</sup>置<sup>と</sup>  
其<sup>の</sup>故<sup>に</sup>御<sup>不</sup>例<sup>御</sup>全<sup>快</sup>の<sup>其</sup>時<sup>に</sup>直<sup>彌</sup>願<sup>ひ</sup>奉<sup>つ</sup>り<sup>必</sup>む<sup>ぎ</sup>拜  
見<sup>ま</sup>わ<sup>る</sup>す<sup>べ</sup>何<sup>ん</sup>も<sup>も</sup>然<sup>ら</sup>ば<sup>に</sup>勅書<sup>の</sup>拜見<sup>の</sup>普<sup>く</sup>其<sup>意</sup>を隨  
ま<sup>べ</sup>然<sup>り</sup>と<sup>雖</sup>も<sup>中</sup>將<sup>殿</sup>勅書<sup>の</sup>下<sup>り</sup>其<sup>上</sup>の<sup>諸</sup>侯<sup>の</sup>建  
議<sup>も</sup>以<sup>て</sup>勅意<sup>を</sup>衆<sup>に</sup>示<sup>さ</sup>ま<sup>さ</sup>い<sup>言</sup>む<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>  
順<sup>次</sup>を<sup>然</sup>る<sup>も</sup>貴<sup>殿</sup>大<sup>老</sup>の<sup>職</sup>に<sup>在</sup>り<sup>る</sup>が<sup>大</sup>  
義<sup>を</sup>衆<sup>に</sup>謀<sup>ら</sup>ば<sup>に</sup>權<sup>威</sup>を<sup>頼</sup>り<sup>獨</sup>斷<sup>あり</sup>し<sup>に</sup>實<sup>に</sup>失<sup>策</sup>と  
云<sup>ひ</sup>ざる<sup>べ</sup>けん<sup>や</sup>是<sup>を</sup>辨<sup>む</sup>る<sup>に</sup>委<sup>細</sup>ある<sup>に</sup>承<sup>り</sup>ん<sup>と</sup>理<sup>を</sup>押

嬰日巳月二





て彦根中將を逼りし中將いふ言葉もなく進退迫  
 り尻りぢく総身汗を流まが如く手持無沙汰のその折  
 柄最前より列座倣しあふ松平讃岐守片腕又進出  
 中將の爲射く觀ふ見うひて申さるやう最早日も西  
 山又傾きぬまが今日の集議は是迄みく席を開き又重  
 て參會倣さん諸侯の御所存いふあくと申されけむを  
 咸可然しとの緯又依り各帰館ふ速べれけるあぞ彦根中  
 將の弁解あさんも辞る進退逼りし其折る讃岐

守の一言ふ薄氷を渉む危所を遁とく俱み退出倣  
 したりけり

第三回

徳而復水戸前中納言齊昭卿を昨日柳管ふ登城あ  
 る彦根中將直弼主と外國通信條約の緯ふ依り飽  
 めを議論あしつ彦根中將あひ勅許を蒙り所置  
 せやう既前條ふも談じ如く辞夫く解れしと中納  
 言あの中將が勅書の下也言訳の素より其庭の遁辞

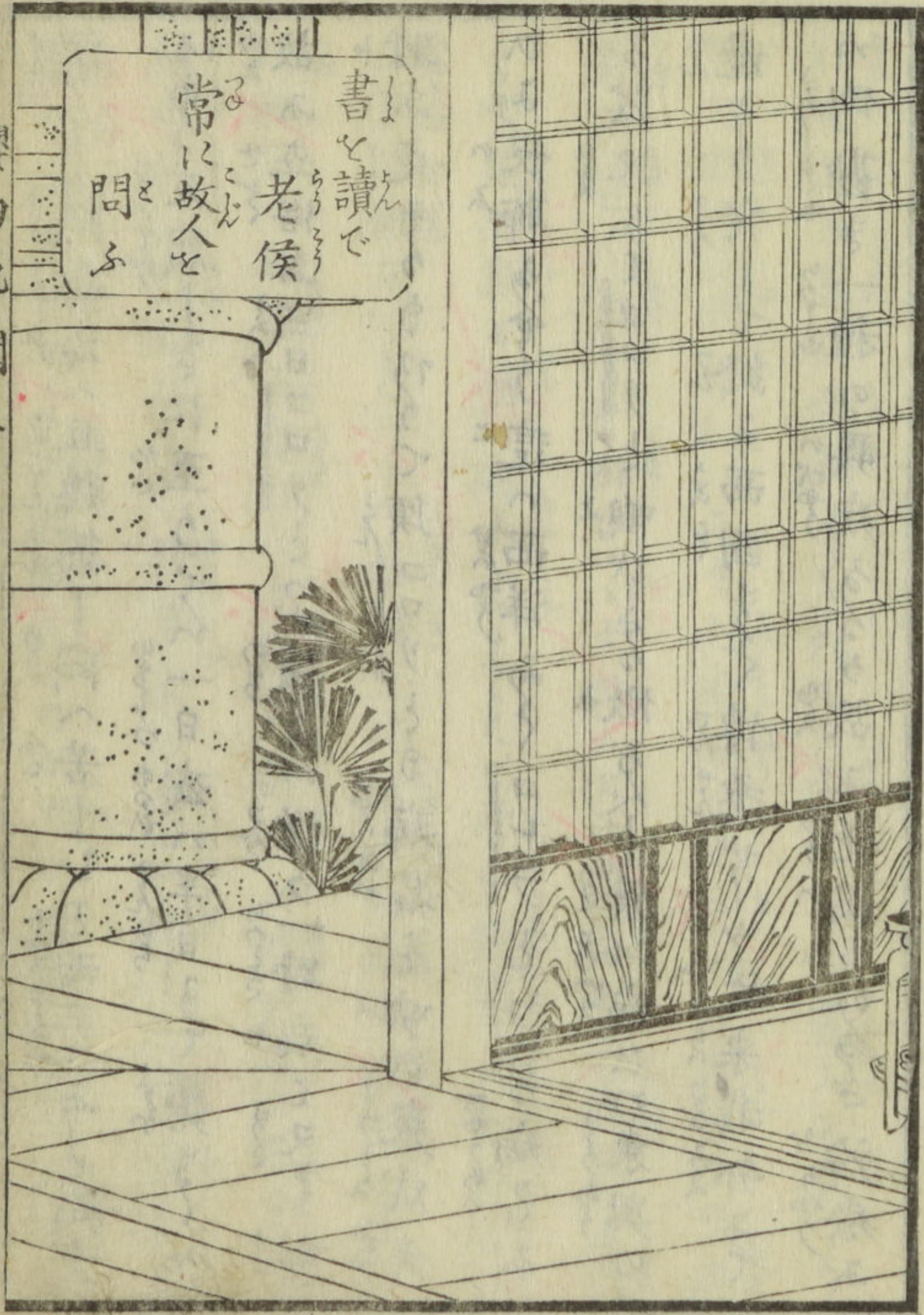


たる~~り~~と兼~~り~~而~~り~~京師~~の~~探索~~あり~~篤~~より~~察~~あり~~ひ故~~あり~~盟~~あり~~  
 二十四日~~明~~六ツ告~~る~~太鼓~~と~~俱~~あり~~小石川~~の~~館~~を~~立出~~あり~~ひ  
 柳~~營~~ふ登城~~あり~~倣~~し~~將軍~~の~~御對顔~~を~~願~~ひ~~あふと雖~~も~~將~~軍~~  
 軍~~あり~~御腦~~彌~~痛~~せ~~ら~~し~~逆~~も~~御對顔~~の~~程~~は~~う~~ら~~ん~~ざ~~る  
 との事~~あり~~け~~し~~無~~念~~も~~ぐ~~も退~~出~~あり~~て~~小石川~~の~~館~~ふ~~  
 歸~~らせ~~あ~~ふ~~程~~る~~幕府~~より~~御使者~~あり~~て前~~中~~納言~~言~~  
 殿~~あり~~當~~今~~御慎~~と~~ある~~べ~~との台命~~あり~~も~~ぞ~~其~~段~~御受~~け~~  
 あ~~せ~~ら~~し~~たり~~然~~る~~ふ~~水戸~~の~~一家~~中~~の兼~~て~~中納言~~の~~志~~し~~

倣~~し~~尊~~王~~攘夷~~の~~赤心~~あり~~昨日~~殿~~中~~あり~~ての議論~~と~~漏~~れ~~听~~き~~  
 不~~日~~攘夷~~ふ~~決~~せん~~と思~~ひ~~勇~~ま~~し~~甲~~斐~~も~~多~~く~~老~~君~~あり~~邊~~  
 の御慎~~と~~受~~ら~~し~~も~~是~~唯~~彦根~~中~~將~~が~~奸謀~~あり~~を~~の~~が  
 悪政~~の~~失錯~~と~~權威~~ふ~~任~~せ~~る~~人~~は速~~が~~恨~~き~~大老~~の~~振~~舞~~  
 る~~も~~怒氣~~を~~含~~ま~~て憤~~ら~~り俱~~ふ~~慨氣~~を~~顯~~し~~け~~り~~茲~~も~~  
 又~~將~~軍家定~~公~~あり~~這~~程~~の~~御病氣~~は~~全~~く~~の事~~あり~~ける  
 六月~~の~~初旬~~より~~海内~~一般~~ふ疫癘~~流行~~する~~ふ~~此~~病~~症~~最~~  
 尖~~く~~して始~~め~~卒~~然~~と發熱~~し~~丈~~より~~俄~~ら~~ふ吐瀉~~する~~事~~と~~









甚しく総身冷へ且縛筋一岡へ苦しむと兩三日あて死す  
るあり又烈しきに至りて一日或ハ半日あて斃るるが  
故ハ壱倍ふ三日コロリとハ後ハ僅ク一時病モ又モ即  
時ハ死するも有りて頻コロリとも病名を喚ビ衆咸大  
ひハ畏肺るをリ這ハ西洋あてコレラとりける病名を  
る然訛りてコロリと喚びる做るべし原此病ハ東輿の  
邊より発して終ハ西國まて傳遷セリが從來我邦あて  
ハ例少キ一種の異病あるが故ハ老函もりるど治療ハ

急に  
急に

慣む是が為ハ全國あて死する者九三十萬人及べり  
憐る折る將軍公家定ふも此疫病ハ在リけん僅クハ病  
着ハ甚く悩ませ給ひて七月八日ハ薨去あり壽三十五歳  
とぞ聞也斯る僅クハ凶変あるが當中周章大方なごん  
上下悲歎ふるもけるが這時まで未だ幼君も在りし故ハ  
何れをハ嗣君ハ定めんと先其許議ハ及びける然るも彦  
根中將の計らひもて將軍家の薨去做ハあハ深く秘  
置只御不例のハ沙汰做リけるが終ハ同年八月八日家定

根中將の計らひもて

秘



公の薨せられを普く天下に知らしめて既其喪を發せしめ京師より同月十七日權大納言源忠禮卿を勅使として關東に下し給ひ故大將軍家定公に大政大臣正一位を贈り謚を溫恭院と賜はる是に依りて御臺所を天璋院と稱しける這は是後の談しあるに繚の便宜に記すなり并に扱ふ幕府の將軍の嗣君を儲け定めんと種々集議し速び一所一橋刑部卿慶喜を正しく水戸老侯の子息ありて聰明

新

英智に涉らせらるれば憊る時勢の折々あり此卿をのこ嗣君とせん度最も至當なるべしと尾州侯を始りて越前津山仙臺土州肥前伊達の七諸侯佐倉上田の両閣老及び石河土州本郷丹州の両參政等も拳つて這の旨を議せらるしみぞ自餘の君も然るべしと大半同意為たりと唯彦根中將の憶ふ仔細のありをみや曾て此議を告げば本来紀州菊千代殿を御養君ふるされ度御内慮



のありけるゆゑ此君を嗣君と定むべしと云々此の  
 意見も更ニ待ず今稔漸く十二歳ふありぬ紀伊  
 宰相殿を執立と願ふ宗家の世嗣とて是と徳川  
 十四代の將軍との稱しける介程ふ故將軍家定公  
 の俄りも薨去在ませしに就ての給々たる取沙汰  
 り其の中ふも彦根中將ふ阿諛幕吏の將軍薨去  
 の急症を名として辞功工は告るゆく近頃水戸の  
 老侯の君が威光を嫉と思ひて子息刑部殿を將

工三  
24

疑

軍の職ふ居り其勢威を借んとし羈ふ緯を儲けら  
 せし是咸君公の英断ふより老侯が策画併とな  
 り然りと人ども將軍の薨去の始未ふ至りてを  
 疑ひ思ひ仔細もあまを俱ふ注意を倣まべきあら  
 折々中將ふ告ぐる者あるを以て常ふ彦根中將の水戸  
 老侯を擯んとする内慮類みまがし是より人の諛  
 を容らば種々探素を廻らし真偽も分ぬ事を  
 名として終ふ水戸老侯を始とありし一百餘名を



目次

撰<sup>ひん</sup>作<sup>さく</sup>一<sup>いつ</sup>彌<sup>や</sup>憚<sup>た</sup>る<sup>る</sup>所<sup>ところ</sup>多<sup>おほ</sup>く慕<sup>ぼ</sup>威<sup>い</sup>を<sup>を</sup>獨<sup>ひと</sup>り主<sup>しゆ</sup>張<sup>ちやう</sup>做<sup>さ</sup>し衆<sup>しゆ</sup>の  
恨<sup>うら</sup>み受<sup>う</sup>けらる<sup>る</sup>此<sup>こゝ</sup>面<sup>めん</sup>頗<sup>おほ</sup>く書<sup>か</sup>盡<sup>つく</sup>し這<sup>こゝ</sup>ふ説<sup>せつ</sup>うん<sup>ん</sup>と欲<sup>ほ</sup>  
せり<sup>よ</sup>と初<sup>はつ</sup>卷<sup>まき</sup>の紙<sup>し</sup>頁<sup>えい</sup>ふ定<sup>ぢやう</sup>額<sup>がく</sup>何<sup>なに</sup>をも开<sup>ひら</sup>け次<sup>つぎ</sup>の卷<sup>まき</sup>ふ  
談<sup>だん</sup>り出<sup>で</sup>まを<sup>を</sup>所<sup>ところ</sup>秘<sup>ひ</sup>か<sup>か</sup>しに<sup>に</sup>對<sup>たい</sup>し<sup>し</sup>ぬ。

門人

淺井 調瓶 校合  
中島 湘湖

櫻田紀聞卷之一終



